

こんな先生  
いるよ!

後飯塚僚  
先生

研究推進機構  
生命医科学研究所 教授



「研究も人生も出会いが  
大事。生命の真実に  
時間と環境から挑む」

「私たちの『生体運命制御部門』という名称は、よく仏教的とか哲学的と言われるのですが、元は『発生及び老化研究部門』というものでした。生命の現象を理解するには『いつ』『どこで』という情報がなければ、『どうして』を正確に問うことはできません。この前提に立ち、ここでは生命の現象に発生学や免疫学の視点から取り組んでいるのです」と後飯塚僚先生は話す。

先生は中でも、時間軸の中で環境が与える影響について強い興味を持っている。たとえば生体として発生したばかりの子供は母親の胎内にあるため、遺伝子だけでなく母胎環境も後の発達を規定する大きな要素となる。細胞が機能を持つ時にそれを支えるのはやはり環境なのだ考えるのだ。

「遺伝子のエピゲノムのその上流には必ずそれに影響を与える複合的で形而上学的な環境の世界があります。それを時間軸で捉えるには、胎児期が一番重要な時期なのではないかと考えています」と言う。

脊椎動物は最初水中で暮らし、やがて陸に上がってきた。その水中から陸への環境の変化が、免疫系の重要な組織の出現や免疫系の進化にも関連する。羊水の中で発達した胎児も出産後は肺で呼吸を始める。

「免疫系の系統進化学的研究は、考えれば考えるほどイメージが広がるのです。その広がりを持ちながら自分は研究したい。新しいことを、いつも想像を膨らませながら取り組んでいたいと思っています」と語る。

先生は高校生のころからダンスに強い興味を持ち、大学に入学するとすぐ2年間休学し、暗黒舞踏の創始者である土方巽ひじかたけんに師

事し、頭は全部刺って身体中を白塗りにし、本気でプロのダンサーになろうとした。

2年後に大学に戻ってからもずっと体を動かしていたので、体の詳しい仕組み、筋肉や骨や血管などについて学びたいと思い、獣医学部の内科学研究室に入った。そこで、病気というものを通して体の仕組みを学んできたと言う。

東大助手時代に免疫学の大家である米国アラバマ大学のマックス・クーパー先生の研究室に2年間留学した。そこでクーパー先生をはじめ多くの研究者たちと出会い、討論し、彼らの研究に対する哲学や信念を自分の実にする事ができた。京大の本庶佑先生や、本研究所所長だった多田富雄先生、現研究科長の北村大介先生に知遇を得ることもできた。「そういう出会いがあったから現在の私があるのです」とも語る。

「大学を休学してでも土方巽というとても大きな人に出会い、フランス文学者の澁澤龍彦など多くの方に会うこともできました。こちらから赴き誰かに会う、それが縁でさらに色々な人に出会えていく。今でも免疫学の研究者たちでロックバンドをつくっているのですが、そこから、さらに若手に繋がる人脈もできます。あたかも、ただのラッキーな自慢話のようですが、まず自分から一歩踏み出すことが重要です。学生には、『出会いこそが自分の人生を変えていくのだから、怯まずに出会っていきようにしてほしい』と言っています。今は難しい時代ですが、それでも私の周りにはユニークな学生がたくさんいますよ」と話してくれた。

太田正人(シエイクリエイト)

【写真左】ゼミの学生たちと

【写真中】故藤野一友さんの作品『抽象的な籠』に感銘を受け、奥様から直接掲載許可をいただいた国際シンポジウム「INNER COSMOS OF THE BODY」のポスター。

【写真右】胎児期に発生した脾臓という組織の血管周囲細胞(赤)は老化赤血球を処理する細胞(緑)を留める「場」として機能している。

